

## 『幸福の王子』と『サロメ』

川 村 二 郎

二十年ほど昔に書いた『翻訳の日本語』という文章で、初めに、外国文学に心をそそられ、その世界にのめりこんだおぼえのある人間にとっては、読書経験のうちに、記憶にやきついた翻訳の幾つかがないはずはないだろうと述べ、続けて次のように書いた。

「自分一己の回想から話をはじめると、最初は新潮社版『日本少国民文庫』に収められた山本有三編の『世界名作選』である。昭和十一年の刊行で、ぼくは小学生三年生だった。……（この『名作選』に）集められていた作品を、今記憶の中からたぐり寄せて見ると、十九世紀自然主義の系列に属するものが過半を占めていたように思われる。つまりいわゆる子供向きの明るくのどかな、衛生無害なお伽噺が並んでいたのではなかった。人生の暗さ、重さに正面から向き合うことを求めるような、厳粛な作を多く選んだのは、多分編者の見識だったのだろう。それにもかかわらず、ここに連なった数々の物語は、全体として輝いていた。あとあとまで消えぬ深い刻印を心に残し、自分の文学観を決定する一つの要因になっているかもしれぬと思うのは、ワイルドの『幸福の王子』である。」

『日本少国民文庫』は全十六巻、昭和十年十一月に第一回『心に太陽を持って』が配本され、昭和十二年八月の『君たちはどう生きるか』で完結した。『世界名作選』はそのうちの二巻、「一」は昭和十一年二月、「二」は十一年十二月に刊行されている。

昭和十一年二月は、二十六日に陸軍の一部が叛乱を起し、大臣たちを殺害した、その月である。『文庫』全巻が完結した十二年八月の一月前には、当時シナ事変と呼ばれた中国との戦争が始まっていた。昭和二十年の敗戦に至る、日本没落の道筋が、大体その頃から、明確な輪郭を示すようになったといつてよい。

そうであるだけ、この『文庫』の、時流に阿らぬ穏健な人間的良識に即した編集方針が、貴重なものだったと感じられるのである。「文庫」の上に「日本少国民」をつけたのは、ある程度、時代に配慮した上での措置と、見れば見られよう。しかし内実は、愛国少年養成を目指す志向とはおよそかわりを持たず、

ただ少年少女の知識を高め情操を豊かにすることのみを考えて、選ばれた文章が集められていたのだった。最終回配本の『君たちはどう生きるか』は、狂信的な集団の圧力に耐えて、個人がいかに精神の自立を守ることができるかを、少年小説の形で問いかけていた。

戦後この本は岩波文庫に入った筈だが、多分今読んだら、ごく常識的な人間観、社会観が記されているとしか、見えなかもしれない。しかし戦前の陰険な時代に、この本を出した著者と出版社の勇氣は尊敬に値する。小学生でこれを読み得たのは、自分にとって実に幸運だった。そのおかげで、敗戦直後の、軍国主義を裏返した左翼小児病的狂熱にも罹らずにすんだ。

『世界名作選』の話に戻る。「一」にはキプリングの『ジャングル・ブック』の一部やトルストイの民話、ケストナーの『点子ちゃんとアントン』などが入っていた。ケストナーに中では一番感銘を受けた。一見子供の読物めいた体裁を取っただけで、人生の奥行をうかがわせる物語なのだという印象を受けた。もちろん小学生が人生の奥行などを心得ているわけもなかったが、ただ、それを予感させる力が十分にケストナーにはあった。

そして「二」には、ドーデの『スガンさんの山羊』、ボンゼルス『蜜蜂マアヤの冒険』などが、『幸福の王子』と一緒に収められていた。『風車小屋だより』からのドーデの一篇では、スガンさんの檻を逃げ出して狼に食われる小山羊の運命を、作者がどう思っているのか、憐れんでいるのか冷く突き放しているのかわからなくて、随分頭を悩ませた。子供にとって、分らぬことを思いあぐねるのは有益なことである。思いあぐねたせいで、文学におけるアイロニーとユーモアの働きを、ずっと後になってではあるが、会得することができたのだと思う。

しかし何より、『幸福の王子』。これには分らぬ所はなかった。少くとも一読して、分らぬ所があるとは思わなかった。ただひたすら、美しく、悲しく、痛ましかった。悲しく痛ましい話なら、同じ『文庫』の『日本名作選』（昭和十一年七月）にもあった。森鷗外の『山椒太夫』。悪逆無道の山椒太夫が、おしまいで許されてしまう所には、釈然としない思いを味ったし、大人になってこの物語がもとづいていた古い語り物を知った時には、鷗外のなまぬるいヒューマニズムが許せないとまで感じた。しかしそれはそれとして、弟を逃して入水する安寿（もとの語り物では山椒太夫に責め殺されるのだが）のあわれや、失明した末、鳥追いに零落している姉弟の母親の悲慘が、心に滲みたことは確かだったのだ。ただ『幸福の王子』のような、たとえようのない美しい輝きは、日本の物語からは放たれていなかった。

もちろんそれを美しいと感じるのは、単純な外国へのあこがれが強くて働いて

いたからにちがいない。見たこともない壮麗な西欧の都会、その空高くそびえる黄金の王子の像、見たこともないだけ一層、このイメージは心をときめかせる力があつた。

そして最初にそのイメージの華やぎがあるからこそ、そのあとの王子の涙、燕の献身、彼らの滅び行くさまが、対照的に深い哀切感をそそり立てることになったのだろう。本を読みながら涙を流したというおぼえはないけれども、くり返し読んで、燕が死に、王子の鉛の心臓が割れ、どちらもごみ捨て場に捨てられる終段へ来た時には、いつも眼の潤むような思いでいたにちがいない。ワイルドという作者の名は、この思いと切り離しがたい、尊い聖者伝説の語り手として、記憶に刻まれた。

この記憶が揺り動かされるのは、やはり同じ『文庫』の中の一冊、『文章の話』を読んだ時である。

里見弴が書き下したこの一冊は、昭和十二年四月に出ている。つまり『幸福の王子』が入っていた『世界名作選（二）』が出たより、ほぼ半年後のことである。この本の巻末には、「文例」として、十人の作家の十篇の作が、あるものは全部、あるものは一部抄出の形で載せられていた。『文章の話』は平成五年に岩波文庫に収録されていて、元版は『世界名作選』などを含め、もうとうに手もとにないが、これは現在たしかめることができる。岩波文庫版では「文例」が十篇あったとして、作者作品名を列記してはいるけれども、例そのものは、一篇を除いて省かれている。日本のものは、大体あまり印象に残らなかった。芥川龍之介の『トロッコ』や有島武郎の『小さき者へ』はとにかくかなり明瞭な映像となってとどまっているが、総じて日本近代文学は、鈍くくすんで感傷的と思えた。むろん小学四年生になったばかりの子供が、そういう言葉で裁断する能力を持っていたわけではない。しかし形をつければそういう言葉になる、曖昧な気分を集められた文章から受け取っていたことは確かである。

日本のものに比べ、二篇だけ入っている外国ものは、はるかに印象強烈だった。一つはメリメの『マテオ・ファルコーネ』、おたずね者をかくまっている家の子供が、追って来た警官（憲兵だったか？）の見せびらかす時計の輝きに魅せられ、時計欲しさに隠れ場所を教えてしまう場面だけの部分訳だったが、訳文を通じてでも、文章にみなぎる恐しい緊張感はひしひしと迫って来た。並の怪談や幻想譚（そういうものも、それなりに好んでいたが）とは全く性質の違う、現実の細密描写の生み出す恐怖に圧倒されて、息をのむ思いがした。

これは岩波文庫版には入っていない。ただ一つ入っているのが、もう一篇の外国もの、それがワイルドの『サロメ』の部分訳なのだった。

どうしてこれだけが入ったのか。どうやら、悪しき文章の代表例として残されたらしい。本文で里見弴は、「うその効用」ということを書いている。文章にはうそがつきもので、うまく使えばよい表現が生れるが、「文章上のうそも、普通のうそと同様に、およそ程度がある」、むやみにうそがのさばっては見苦しい文章になる、というのが里見の意見である。

この場合、具体例を見ると、うそといって里見が比喻、ないし形容を意味していることが分る。要するに「……のような」が多い、「形容だくさん」は、「もうひと時代前のはやりになっています」というのである。

ワイルドはほかならぬ、時代おくれのスタイルの典型として、例示されていた、というより、さらしものにされていたわけである。引かれているのは戦前の岩波文庫、佐々木直次郎訳（戦後は福田恒存訳）、『サロメ』のうち、女主人公がヨカナンに近づき、その美しさをたたえる所。

「お前の体は、草刈人がまだ一度も鎌を入れたことのない草原の百合のように白い。お前の体は、山々に降り積る雪のように、ユダヤの山々に降り積って谷間を下って来る雪のように白い。アラビアの女王の園に咲く薔薇も、お前の体ほどには白くない。アラビアの女王の園に咲く薔薇も、草葉の上を踏み歩く暁の足も、海原の胸の上にやすむ時の月の胸も、それほどには白くない。」

今読み返すと、里見弴は『文章の話』で、ワイルドについてそれほどきびしいことをいっていたわけではない。「ひと時代前のはやり」が「今から見ると、少しうるさい感じ」という程度。しかし『幸福の王子』で心底感動していた小学生にしてみると、それは思いもかけなかったえらい先生の判定として、ほとんど死刑宣告めいたひびきを帯びて耳にひびいたのである。

『サロメ』のあらすじは書いてなかったと思う。生首への接吻といったグロテスクな趣向はその時は知らなかったはずである。それにもかかわらず、『幸福の王子』の悲しく清らかな美しさとは似ても似つかぬ、まがまがしく胡乱な局面がこちらにあらわれていることは、すぐさま感じ取らざるを得なかったのだ。

信じ切っていた人が、思っていたのとは全く違う人だった。そう気づいた時のショック。世の中を知らない子供にとってはごくありふれたショックだが、大人の世界には分らぬことがあると、そこで判断を停止してしまう代りに、この子供は、もう少ししつこく、両方を比べて違いを考えた。『サロメ』のスタイルを見た目で『幸福の王子』を振り返ると、たとえば「燕よ、燕よ、小さな燕よ」というリフレインのようにくり返される王子の呼びかけにしても、燕の語るエジプトの不思議の数々にしても、様式化の意識過剰な人工的文体ということになるのかと思わねばならなかった。だからといって、王子と燕の痛ましい

愛の物語が、まるごと白々しい「うそ」で塗り固めた家というこになるのか。改めて念を押すまでもなく、その頃こうした言葉で考えたわけではないのだが、また考えた末に何らかの確かな認識を得たわけでもないのだが、少なくとも文学における「うそ」と「まこと」のかかわりに、初めて接触したきっかけが、ワイルドにあったことは疑えないのだった。

いずれにしても、ワイルドはこの後、単純に享受できる文学ではなくなった。思春期に近づいて行くにつれて、禁忌の匂いがまつわるのも気がかりになった。岩波文庫の『サロメ』を読んだのは小学校六年生。『幸福の王子』や『文章の話』を読んだ時は東京の小学生だったが、六年の時は朝鮮半島南部のある街に住んでいた。その街で旅館を営んでいる家の子が同級生で、広い旅館の庭で遊びもしたけれど、庭で遊ぶより、客室ではない、納戸のような部屋に、雑多な本が置いてあるのを引張り出す方が好きだった。坪内逍遙の新修シェークスピア全集が揃っていて、名作も数多くあるのに、『タイタス・アンドロニカス』とか『ルクレチアの凌辱』とか、血と性欲にまみれた初期の残酷作品にひきつけられた。『サロメ』もそれらと一緒にあった。何よりピアズレーの挿絵。旅館の何となく隠微、さらには淫靡な一室で、見てはならぬものを見ているという罪悪感と、禁忌を侵しているという快感とが、体の中で交錯し渦巻いていた。

これは昭和十四年のこと。翌年、かつての皇紀二千六百年に中学に入るが、それからはもう大日本帝国は滅亡に向ってひた走る一方、そんな時代の中でもこちらの文学愛好癖は、時代と関係なくいよいよ深みにのめりこんだけれども、好みも次第に明瞭な輪郭を取り、ドイツのロマン主義に一番ひびき合うものを感じるようになった。イギリス文学なら、ウォルター・ペイターの静謐な幻視に至上の魅惑を見出したが、弟子ワイルドについては、幼年期の錯綜した印象を持ち越したまま、さして関心を向けることなく過していたのだといってよい。大体戦中は法外な本の欠乏時代でもあって、読みたい本をすぐ手に取れるような状況からは最も遠かった。

次にワイルドに接したのは、敗戦直後、昭和二十一年に古本で買った西村孝次訳『芸術論』。当方は名古屋の高校三年生だった。巻末に「昭二一、八、二六」と記してあるので読んだ時期が確認できる。その頃読んだどの本にも日付を記入していたわけではないので、読後何がしかの感銘を受けたことには間違いはない。しかし敗戦後満一年、苛烈をきわめる生活の窮迫の中で読むには、ノッティングハムシャの山荘やピカデリーの邸宅で、教養ある優雅な芸術青年たちが語り合うという形の対話篇は、あまりにも雰囲気に読む若者の環境とへだたりがあまりすぎた。「うそ」を推奨するのに随分「まこと」をつくしているなどは思っ

たものの、それ以上に深く心に食いこんでくるものはないようだった。

ワイルドと本当に対面できたと思ったのは、その翌二十二年、大学に入った時である。仲介してくれたのはドイツロマン主義の、最後の、そしておそらく最高の継承者、ホフマンスタールだった。

この年、創立されたばかりの角川書店という出版社から、ホフマンスタールのエッセー集『詩に就ての対話』が出た。訳者は富士川英郎。富士川義之氏の父君である。この一巻から受けた啓示は計り知れない。『チャンドス卿の手紙』から始まり『帰国者の手紙』『道と出会』と絶妙の散文が連なり、『千一夜物語』『バルザック』『ゲーテの「ウル・マイスター」』と、洞察とヴィジョンに満ちた文学論が続き、文学について語るとはどういうことか、その模範というべき文章を目にする思いで、ひたすら集中しながら、ほとんど恍惚として熟読した。その中に、『セバスティアン・メルモス』の一篇があった。

僅か八ページの短文だが、内容はおそろしく稠密で、凝縮されている。キーワードは「全体」。「到る所に全体がある Es ist überall alles」。富士川訳を引けば次のようになる。

「到处に全きものがあるのである。浅薄なものの中に悲壮なものがあり、悲壮なものの中に愚鈍なものがある。快樂と呼ばれてゐるものの中に、息のつまるほど不気味なものがあり、娼婦の衣裳のうちに詩的なものが、詩人の情緒のうちに俗なものがある。人間のうちにはすべてのものがあるのだ。」

つまりワイルドの生涯を、別々に区切って見てはならないということである。最初は輝かしく魅力的な誘惑者、ついで罪に墮ち牢獄に入り、出獄後は落魄してやがて窮死した。そのような転変はしかし表面的なもので、実の所はワイルドはいつも同じ人間であり、その人間にふさわしい運命を甘受したのだというのが、ホフマンスタールの見方である。

「オスカア・ワイルドの人間とオスカア・ワイルドの運命はどこまでも同一のものなのである。彼は慧眼にして盲目なエエディプスのやうな足取りで破滅に向って進んでいった。この耽美主義者は悲壮であった。この気取り屋は悲壮であった。彼は両手を天空に伸ばして運命の電光を我身のうへに引きずり下ろさうとした。」

これを読む前に、思い返してみれば、神近市子訳（改造文庫）『獄中記』やアンドレ・ジッドの『オスカア・ワイルド』（世界文庫）に目を通してははずである。前者は完本の出版以前の、キリストへの信を中心にした抜粋本の訳であり、後者には、出獄後のワイルド、つまりセバスティアン・メルモスの最後の日々の悲慘が、年少の友人の目を通して活写されていた。ホフマンスタールの

見方が正しいかどうか、疑ってみてもよかつたろう。しかしこちらにとって正しいか正しくないかはさしたる問題ではなく、ただ人間を全体としてまるごと捉えてしまう、力業ともいふべき幻視の強烈さに驚嘆していたのだ。その幻視が、『幸福の王子』を書き『サロメ』を書いた人が、まぎれもない一人の人間だということ、直観的に理解させたのである。

昭和二十二年には、戦中から続いていた外国図書の輸入禁止措置は、まだ解除されていなかった。原書を手に入れるには古本屋しか当はなかった。近年と違って戦前は、旧制高校用の教科書として、かなり分厚い作品が翻刻されていて、充分原書代りになったから、そういうものも熱心に探した。今でも持っている研究社英文学叢書のペイターの『ルネサンス』、小英文学叢書（ポケット・イングリッシュ・シリーズ）の『サロメ』などは、そうして高校生時代に名古屋の古本屋で買ったものである。大学に入ってからには主にドイツ語の本を漁り、ホフマンスタールの二巻の散文選集やヘルダーリン全集やC・F・マイヤー全集などを入手したが、何分古本では渉猟するにも限りがあった。

外国書輸入が再開されたのは、こちらが大学を出た昭和二十五年のことである。欲しい本はそれこそ無限にあったけれども、今度は囊中の乏しいのをたえず嘆かねばならなかった。なるべく値の張らぬ割安の本を、カタログを睨みながら選び出したうちに、パンフレットのように薄っぺらな『ホフマンスタールの変容』という一冊があった。一九四九年版、著者はリヒャルト・アレヴィン。

「かれこれ五十年前のことになるが、ロンドンで、ヨーロッパの社交界と文壇に少なからざる話題の渦をよびおこした或る出来事が起きた。」（松本道介訳）

こう書き始めてこの論は、先ずワイルドの事件を話題にする。ホフマンスタールを論ずるのにワイルドをまず持ち出すのは、もちろん論者にそれなりの心づもりがあるからである。唯美主義者の没落、栄光から暗黒、名誉から恥辱への急激な転変というモチーフを、ワイルドに即して提示した後、アレヴィンは、ワイルド裁判と同年、一八九五年に発表されたホフマンスタールの短篇、『六百七十二夜のメルヘン』を、同じモチーフを扱った作品として取り上げる。

高校時代すでにホフマンスタールについてはある概念を持っていたが、決定的な出会だったのは、先にいった古本漁りの道筋で、『ドイツ詩人たちのメルヘン』というドイツ語教科書を見つけ、さして期待もせずに読んだこの作品だった。幼少時の最も重要な読書経験が『幸福の王子』だったとすれば、少年期の終りでは、間違いなくこの一篇が挙げられる。

一口でいえば、世を避けて隠者のように引きこもり、自分一己の優雅な趣味生活を送っていた裕福な青年が、その趣味生活を乱されるのがいとわしいばかりに街へ出、迷路のような道をさまよった末、馬の蹄にかけられて死ぬという話。アレヴィンはこの主人公とワイルドの運命の共通性を認めた上で、ホフマンスタールが後に、美的生活から脱け出し、新たな人生の道に就こうとする人間の姿を描いたことを積極的に評価し、それを「ホフマンスタールの変容」と名づけていた。

第二次大戦後のホフマンスタールの評価の高まりに、明らかに寄与したアレヴィンの論文は、時代の制約もあってといえようか、いささか図式的な嫌いがあるが、ここでその点に深入りしようと思うのではない。ただ『セバスティアン・メルモス』でホフマンスタールが幻視したワイルドの形姿と、同じものを『六百七十二夜のメルヘン』の主人公にも見出すことができているとだけ、述べておきたい。話の表面を辿れば、この主人公は人生においてまともな道を歩むことを拒否した報いで、人生から残酷に復讐されたという風にも読めよう。しかし実は、彼の本性と彼の運命とは完全に同一なのではなかったか。没落は最初の美的生活のうちにすでに内包されていたのであり、最後の破滅は単にその包皮が破れたということにすぎない。そう考えれば、もし人生を拒否しなければ彼は破滅せずすんだであろうに、という具合に仮定するのは、ほとんど俗物的な倫理志向に墮することになる。

「到る所に全体がある。」

ワイルドをこの呪文のもとに捉えていいかどうか、客観的な検討にこの呪文が耐え得るかどうかは、問題があるかもしれない。しかし『幸福の王子』と『サロメ』との、どちらが「うそ」でどちらが「まこと」か、思い悩んだのは、いかにも幼稚な小学生の疑問であったとしても、そうした幼い読書経験があったせいで、「全体」の幻視にまでたどり着くことができたのだと思えば、ただ遠い記憶として笑い捨てる気もしないのである。

(付記。これは日本ワイルド協会平成十一年全国大会において行った講演の内容を骨子として、敷衍と潤色を施したものである。)